

IPにおける場の4段階

大学の学生が子どもたちに実施しているプログラムを見ると、トレーニングを受けていないにもかかわらず、非常に上手に場を盛り上げ、参加者を引きつけ、飽きさせず、メリハリをつけて話ができる者がいる(すぐにもスカウトしたいくらいだ)。もちろん、あまり上手でない学生、まったく場を盛り上げられない学生の方が多いのだが、どうやってこの差が生まれるのだろうか。もともと上手な話し手は、「聞き手やその場が、どのようになるとよいか」ということを意識できて、そのために「自分がどう話したらいいか」理解でき、「恥ずかしがることなく」「臆することなく」話し手(場の作り手)を演じることができるのだろう。

ここでいう「場」は、「空気」とも「雰囲気」とも呼ばれる。「KY」という流行語は、「空気、読めない」の意味だが、多くの方は、その場にふさわしくない言動がとられることには気づく。つまり、インタープリテーションや環境教育のプログラムの指導においても、その場にふさわしい言動がとられていないと参加者はストレスを感じることになる、ということが言えるだろう。「場作り」に関しては、四つの段階(とらえ方)がある。それぞれの段階について、意識できるようになると(もっと進むと、意識できずにできるようになる?)、参加者にストレスを感じさせずに、インタープリターとしていい場を設定できることになると思う。以下に四つの段階を説明しよう。

●場をわきまえている

- ・いつも主役は参加者であることを意識できている。
- ・IPは脇役だが、時にはリードする必要がある場合もあることもわきまえている。
- ・解決方法を知っている。思考が進む方向をイメージできる(経験がある)。
- ・誘導しない。援助者でいる。目立たないが重要な役割(コーチング的)。
- ・時間を守る、信頼を守る、関係を守る。

●場をつくる

- ・参加者にとってストレスのない状況をつくる(プログラムの形をつくる)
- ・プロセスを明確に提案できる(会議なら、成果(目標)、アジェンダ(内容、進め方)、時間の管理など)
- ・主体的な参加を促し、プロセスを促し、気づきを促す。
- ・時間や話題の進行を管理する(あるいは促す)。公正かつ公平、平等にしながら、多様性を認め、少数意見もいかに。会議ならコメントは排し、理解を促す質問や提案を取り上げられる。

●場をよむ、場にかかわる

- ・状況を的確に把握する(感じ取る)。
- ・効果的な介入のタイミングを見て取れる(介入すべきかどうか、推すべきか引くべきか)。
- ・めだたないが確実に効くツボをタイミングよく推す。触媒のような媒介者(援助者)である。口や手を出さずにヒントを出す。
- ・常にポジティブ、建設的、創造的である。

●学べる場をつくる

- ・楽しく、互いに、体験(作業)から学べるように、適切に関わる。
- ・効果的な介入の内容を判断できる(一番いい状況のイメージが持てる)
- ・参加者から引き出す。参加者どうしをつなぐ。
- ・認知や創造のしくみについて理解している(解説員の視点58に記載)。
- ・マインドフローを意識し、実践できる。

以上の場の四つの段階は、インタープリテーションの場合のこと、ともいえるが、もちろん、ファシリテーションでも同様だ。環境教育のプログラムのファシリテーションとインタープリテーションとの違いをよく聞かれるが、プログラムはそれを通して参加者自らが気づく/学ぶことが理想ではあるものの、プログラムをインタープリテーション(メッセージを伝える)ためのツール、としてとらえると、同様であることに合点がいくだろう。

発行：東京都立奥多摩湖畔公園 山のふるさと村ビジターセンター

〒198-0225 東京都西多摩郡奥多摩町川野 1740
 TEL : 0428-86-2551 FAX : 0428-86-2316
 E-mail : yamafuru@hkr.ne.jp URL : http://www.yamafuru.com
 企画・編集：自然教育研究センター 2011年1月発行

< 編集後記 >

季節は寒くなり、年始には雪も降りました。明け方は氷点下の日が続き、霜柱を踏みしめる毎日です。寒さ厳しくなりますが、葉が落ちた木々にとまる野鳥を観察できる良い季節となりました。毎日冬鳥の飛来を心待ちにしています。(加藤)